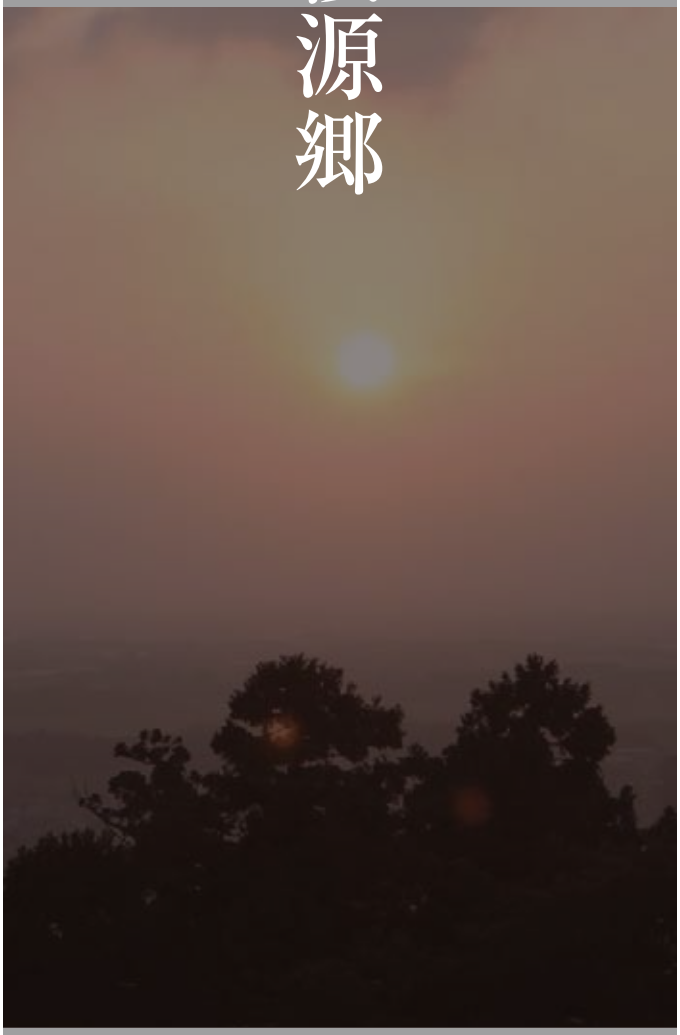
桜源郷



桜川市景観まちづくりマスタープラン（素案）の骨子

はじめに

桜川市は広大な関東平野の北東部にあり、その恵まれた自然環境は、「常陸風土記」や平将門の説話などに記されている。また、紫峰筑波山をはじめとする八溝山系に抱かれ、桜川の流れと共に、個性豊かな風景を醸し出している。

豊かな自然と歴史を持つ桜川市、その恵まれた風景を、未来へとつなぐことは、わたしたち市民一人ひとりの責任と実行にかかっている。

しかし、現代社会の都市化の波は、恵まれた風景との調和を図ることなく、無造作に侵入し続けている。こうした現状は、美しい風景を失うだけではなく、心の豊かさも失いかねない。

恵まれた風景と時代の変化との調和を求め、より美しい桜川市を創るために、本書が活用されることを願っている。

目次

桜源郷をめざして　・・・・・・・・・・・・・・・01
桜源郷のすがた　・・・・・・・・・・・・・・・・03
桜源郷をもとめて・・・・・・・・・・・・・・・・10
　計画の取りくみ方
　地域の特性を生かす　自然景づくり 13
　地域をつなぐ　社会景づくり 14
　さと・まちを構成を構成する要素を磨く　生活景づくり 18
桜源郷をはぐくむ・・・・・・・・・・・・・・・・21

桜源郷をめざして

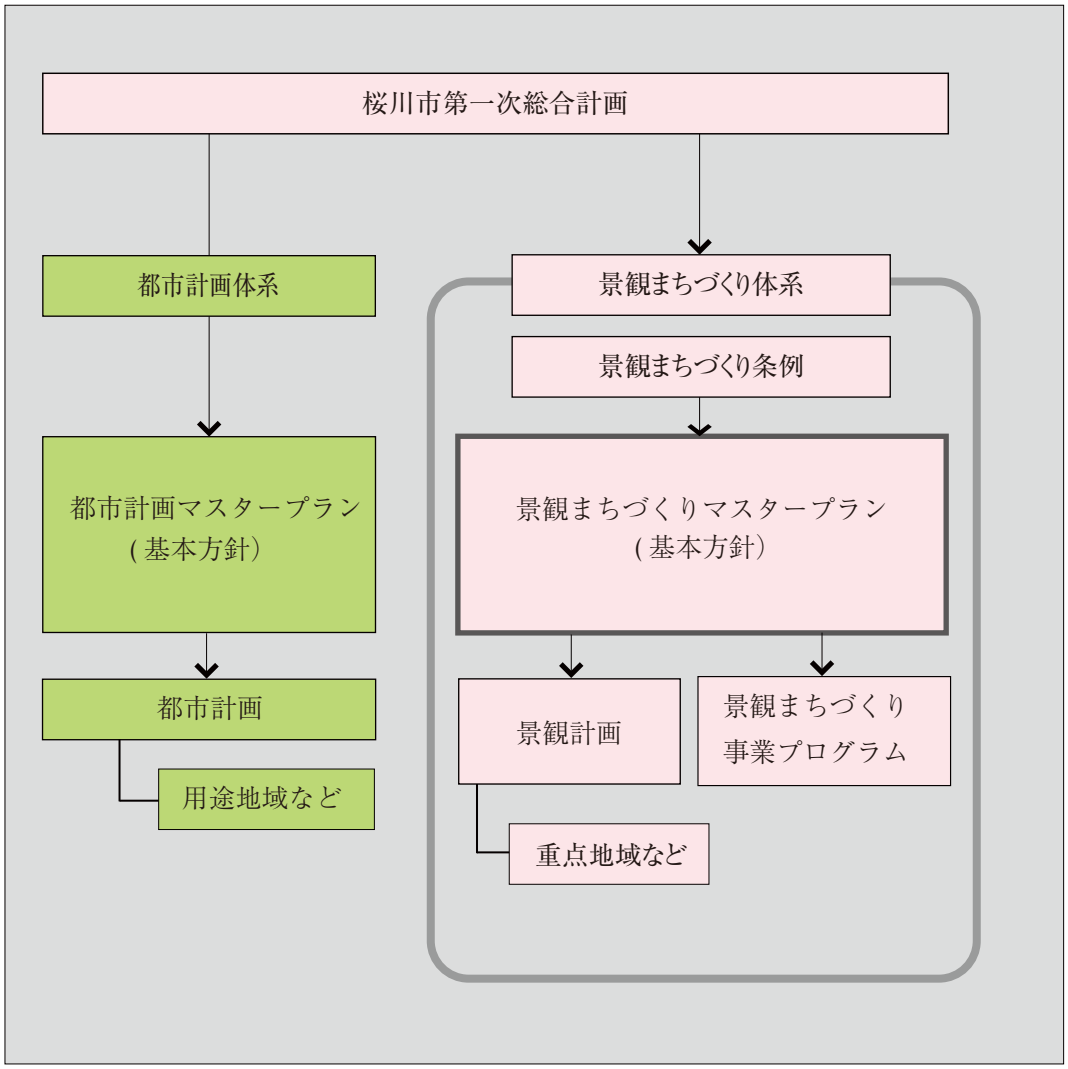
景観まちづくりと景観まちづくりマスタープラン

桜川市の景観まちづくりは、総合的なまちづくりを実現するための、長期的な展望の一つである。

また、従来から進めてきた「都市計画」による、まちづくりに加えて、都市の空間構成に主眼を置いて、市民協働のまちづくりを、より発展させるためのものであり、歴史に裏打ちされた自然資源の保全や産業・文化の育成などを、積極的に支援する意図も含まれる。

本計画は、景観まちづくりの基本方針として、それらのねらいを効果的に推進するための景観的な目標像と、基本的な考え方を明確に伝える目的をもつ。

景観まちづくりと他の関連計画との関係図



桜川市景観まちづくり関連計画書と役割

桜川市景観まちづくりマスタープラン
（景観まちづくり基本方針）

桜源郷をめざして

計画の位置づけ
・目的・目標

・景観まちづくり計画および他の計画との関係づけ

桜源郷のすがた

目標像・現況課題

・広く市民に対し、景観への関心を高めることを目的としたもの

桜源郷をもとめて

基本方針・考え方

・桜源郷の実現に向けて、基本的な方向性と考え方を示している。
・計画を具体的な行動に移すための、よりどころとなることを意図している。

桜源郷をはぐくむ

市民主体のとりくみ
・計画の発展と管理

・市民参加手法の概要
・計画の実行手法
・計画・整備プログラムなどの評価

桜川市景観計画
(景観法の法定計画)

景観の規制・誘導と景観法の有効な活用を意図する。

・景観計画区域の指定

・行為の制限に関する事項

・景観重点地域

・景観重要建造物・樹木など

景観重点地域の計画

重点地域の景観形成を進めるために必要な事項を定める。

・行為の制限に関する事項
・景観形成方針　など

景観まちづくり事業プログラム

景観まちづくりを推進するための事業を体系的に位置づける。

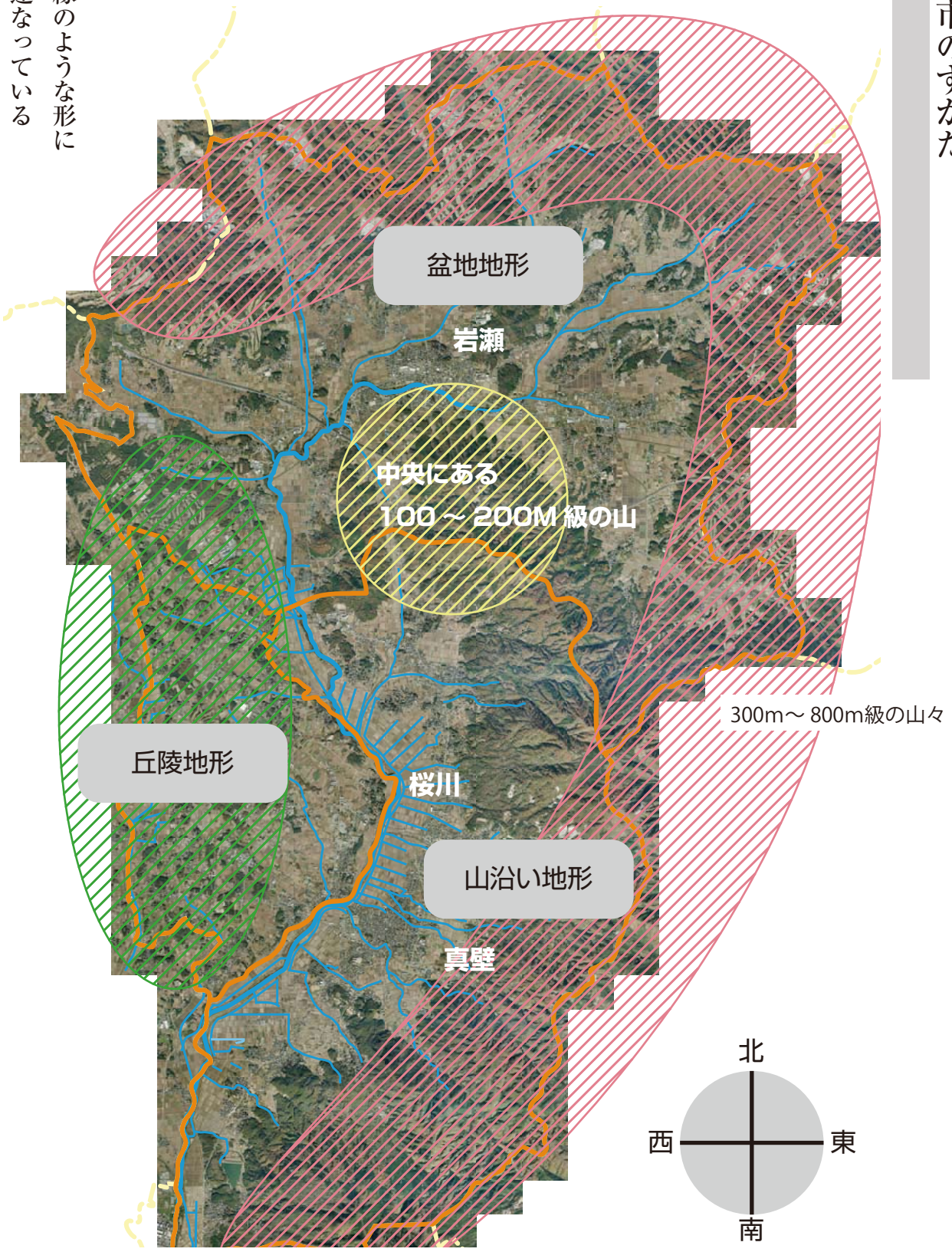
・多様な事業の実施主体の参画
・総合的な事業の実施
・年次計画　など

桜源郷のすがた

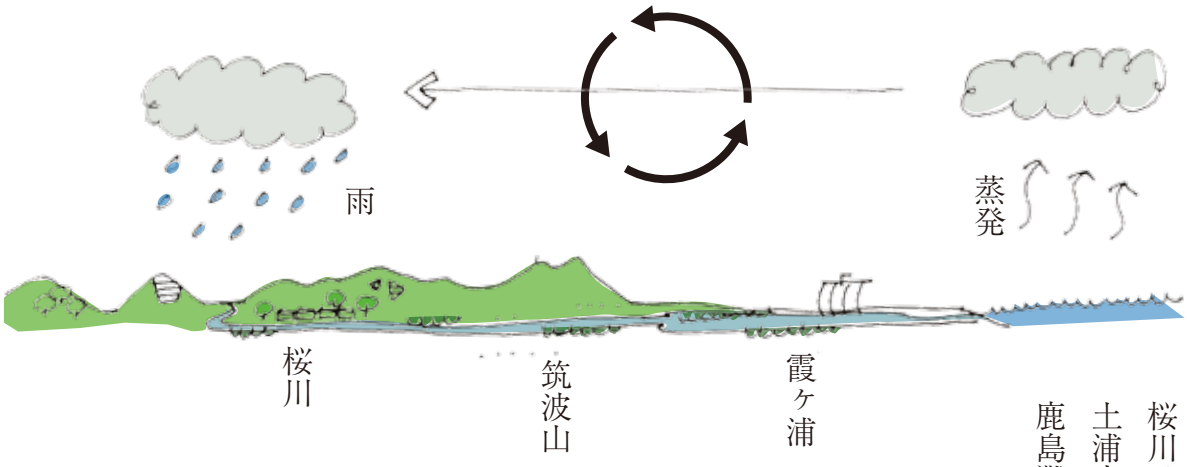
桜川市のすがた

地形

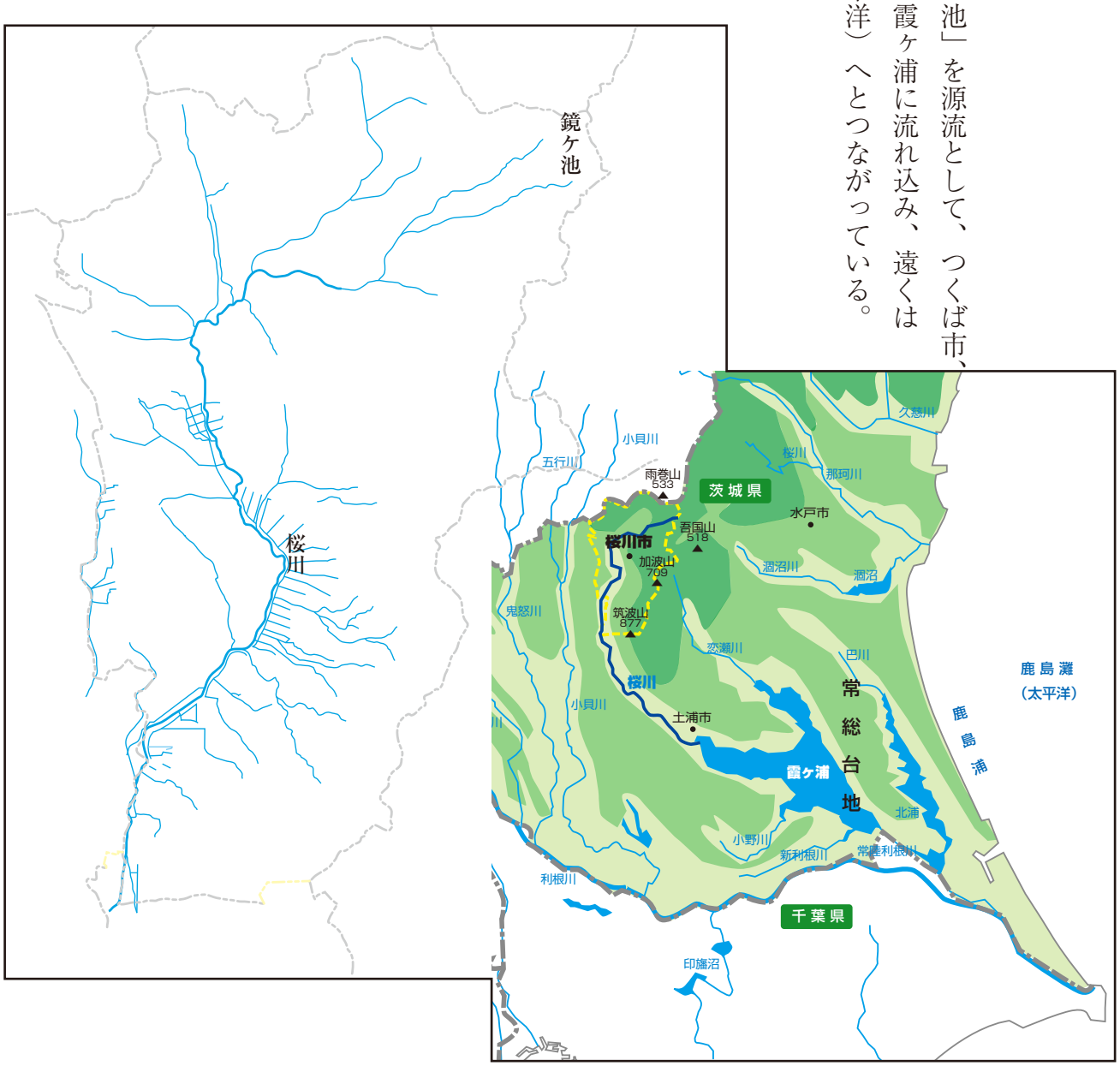
耳の縁のような形に
山が連なっている



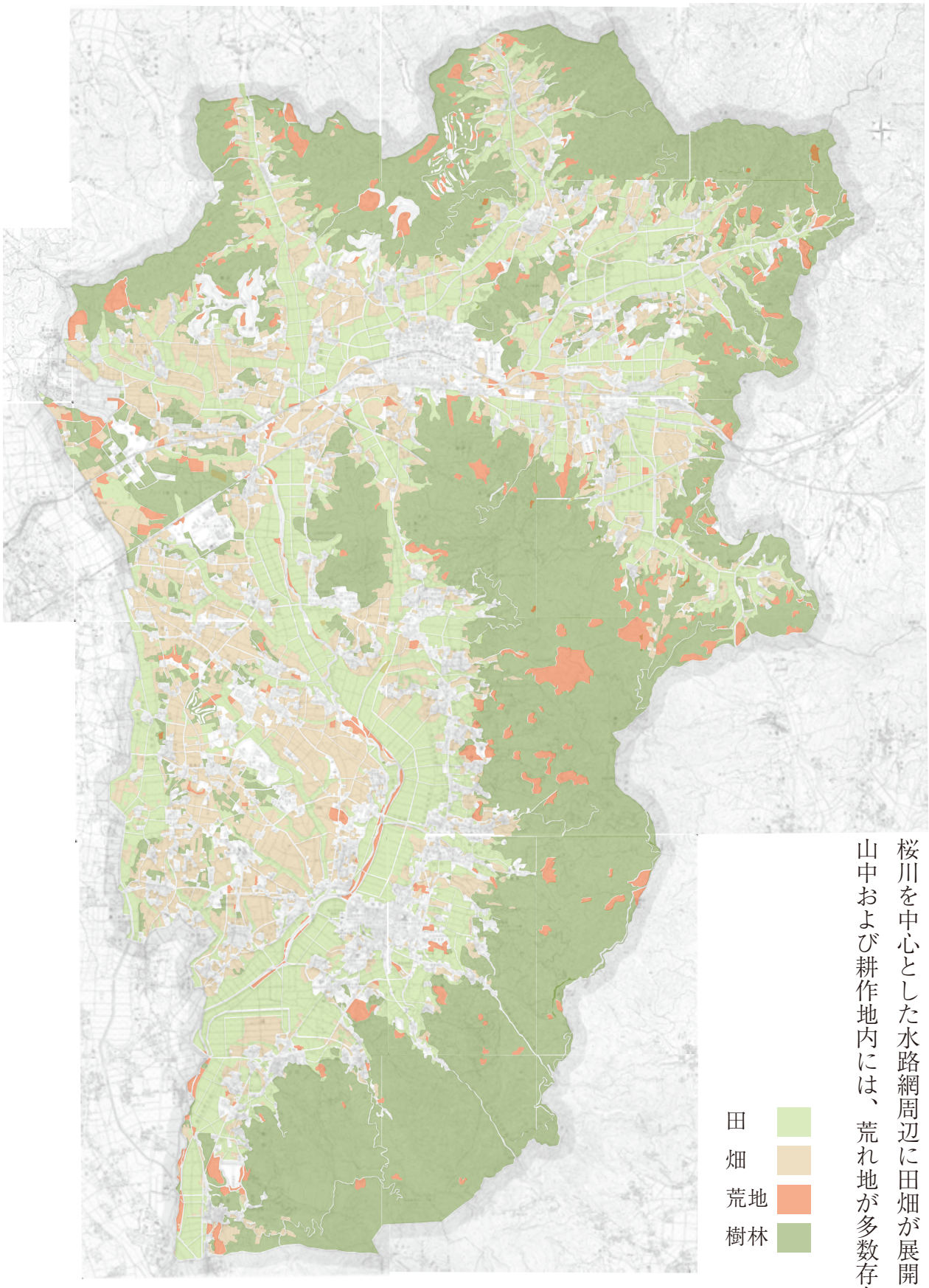
桜川水系



桜川は「鏡ヶ池」を源流として、つくば市、土浦市を経て霞ヶ浦に流れ込み、遠くは鹿島灘（太平洋）へとつながっている。

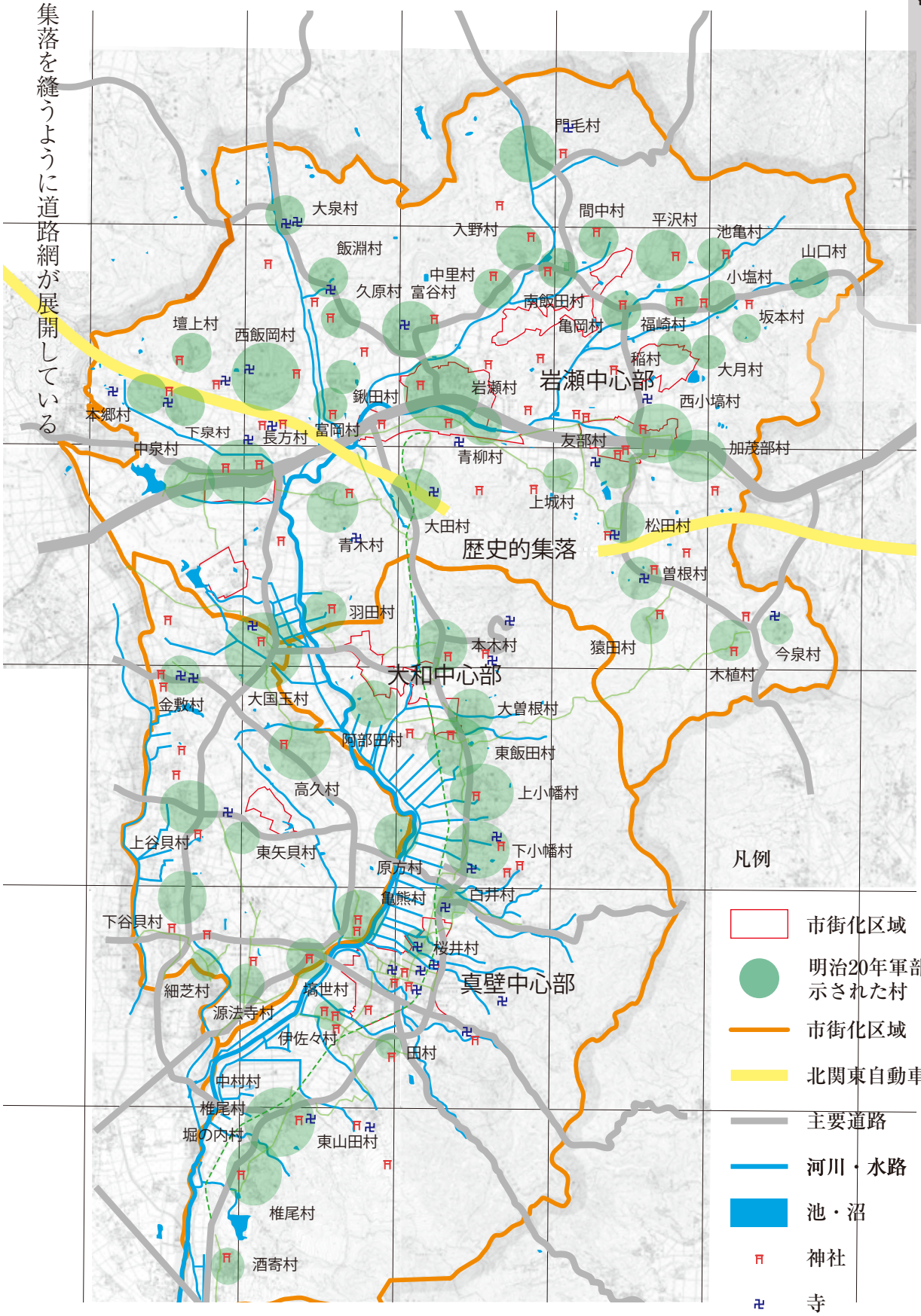


土地利用



市域の約半分を山地が占め、
桜川を中心とした水路網周辺に田畑が展開し、
山中および耕作地内には、荒れ地が多数存在している。

地形および集落を縫うように道路網が展開している



現況

地形

地域のシンボルである筑波山・加波山などが真近に見える個性的な場所である。

市の面積の40％が山地に当たる。

山地内では、花崗岩が産出する。また、古くから山岳信仰の地として知られている。

土地利用

山並みを背景に、田園を舞台にした生活が、繰り広げられている。日本の原風景的景観をもつ。平地の半分を田と畑が占める。市内には、石材の採掘場などを含み、荒れ地が多く点在している。

桜川水系

桜川は、北東部の鍬柄山にある鏡が池を源流としている。桜川は、北部では西へ、中央から南へ向かって流れ、ほぼ、市の中心部を流れている。全長は約○キロメートルで○本の支流をもつ，うち市内の支流は○本である。

河川景観は、水田沿いはほ場整備済みの部分が多く、直線形に整形されている。

河川構造も三面コンクリート貼りの護岸が多いため、自然河川のイメージから遠く、どちらかというと人工的な用水路に見える。

水辺の景観

市内にはため池が散在している。週末になると魚釣りに興じる人でにぎわう。市民にとって大切な場所であり、生物にとっても貴重な空間である。

道路・集落

道路

（北関東自動車道・国道・県道・市道）

主要な幹線道路のうち、北関東自動車道と国道50号線と50号バイパスが岩瀬地区の盆地内を東西に横断している。他の主要な県道は、真壁を中心に放射状に走っている。中でも県道つくば益子線は市内を南北に縦断し、山並みに沿って走る。市道は、各集落を網の目状につなぎ、生活道路としての役割を果たしている。桜川と県道つくば益子線の間に並行して走る農道は、直線区間が長く信号が少ないために、通勤路として使用されている。

山地が多くを占めるため、市内を走る主要な道路は、地形の制約を受けた位置にある。

地形の影響の少ない北関東自動車道は、隣接市町村を含めて三か所のトンネルの抜け出た二か所で、岩瀬と羽黒の盆地に道路を表す。

市民アンケートでも良い景観として多くの回答があったのは、栃木県側からトンネルを抜けた、下泉・坂戸のあたりの右手に筑波山、正面に加波山、左手に富谷山を一望できるパノラマ景観が広がる。

50号バイパスは、飛行場かと錯覚するぐらい道路幅員が広い部分がある。沿道には、大型の商業施設や石材工場、飲食関係の店舗などが林立している典型的な郊外の商業景観を呈している。同様に県道つくば益子線、石岡・筑西線の真壁地区も郊外商業景観をもつ。

偶然の山アテ道路

筑波山・加波山・富谷山など市内には形や特徴の分りやすい山がある。岩瀬市内の道路からの富谷山。大国・鷲宿・塙世地区からの筑波山・加波山などに正対する道路がある。

つくばりんりんロード（桜川土浦自転車道）

旧筑波鉄道の廃線あとを自転車道として県が整備したものである。

全長約40キロ。一部車道と化すところがあるが、ほぼ全線が車と並走することなく自転車を楽しむことができる。途中には旧駅跡としてホームや並木が残り、トイレなどが整備されている。昨今の自転車ブームもあり、休日にはサイクリストがたくさん訪れている。

ハイキング路（登山道）

市内の山は低山であるが、古くから信仰の山として有名である。筑波山・加波山・雨引山・富谷山・権現山などには登山道がある。筑波山から岩瀬に縦走登山もできる。最近では信仰のための登山は少ないが、桜や紅葉の時期はハイキングを楽しむ人々が増えている。

集落

市内には、たくさんの集落あと遺跡が存在し、古くから人々が暮らしてきた地域である。明治二十年の陸軍測量図を見ても、市内余すところなく集落が点在している。中でも岩瀬と真壁地区は交通の要衝、産業拠点としての地の利を活かした都市化が進んでいる。

しかし、東京近郊や県庁所在地と距離をおき、鉄道交通網からも外れた位置にあることからベッドタウン化はならず、商業や工業の発展が鈍い状況にある。

しかしながら、そのことがある意味幸いし、歴史的な資産が残る結果となった。江戸期の真壁商人の中には、大名にお金を貸すほどの大富豪が存在した。真壁地区が伝統的建造物群保存地区としてあるのも、その時代の栄華の証である。また、市内のあちこちに、大きな屋敷や長屋門、石垣を持つ農家が多く見られる。豊かな農産物や石材を背景とした豪農もたくさん存在した。

観光

国の名勝として、また天然記念物として指定された十一種の山桜は学術的にも貴重なものが存在している。

山桜以外にも、市内には多くの桜の木が存在している。

市内には、歴史のある寺社・仏閣が存在しているが、全国的に著名なものはない。雨引山楽法寺は「雨引観音」と呼ばれ親しまれている。

主な課題

土地利用

山地内・農地内・河川周辺など広範囲に荒地が存在している。とくに山地内の荒地は、手つかずで、放置状態にある場所が多い。山林の荒廃は、水源の涵養力が衰えたり、良質な土壌の確保が難しくなる。山地内に生息する動植物への影響や、養分の少ない水による農作物への影響、土砂の流失など様々な影響が出る。自然景観の大半を山地が占めるため、山地の健全な森林管理は大変重要な課題である。

桜川水系

水質の確保

低山のため、山の奥行きが浅く、河川距離が短い。降った雨は、短時間で市内を通過するため、雨期や大雨、事故などにより、汚染された水が即、河川に流入することが考えられる。

河川の存在が市民の中に希薄

塙世橋より上流の桜川は、支流も含め、生活の風景の中に、川面が現れにくい位置や構造となっている。そのため、市民の意識の中に、河川の存在を記憶として留める力が弱い。

道路・集落

道路沿道の商業景観と自然景観の調和

桜川市の場合、商業地の背景に必ず山が見える。商業施設と山の重なりは、山を見たい人にとって目障りとなる。買い物する人からは、気にはならず、問題にならない。一般的に地元の人は気にせず、来訪者が気にする場合が多い。市内には、著名な山があり、来訪者も訪れる。また、商業地区も、おもてなしの場所と考えれば、多少周辺に配慮した建て方やデザインを気にする必要がある。

景観的に優れた道路からの眺望の確保

筑波山・加波山・富谷山を正面に見る道路上は、できるだけ景観要素を整理する。とくに、高い構造物や視界を遮蔽する屋外の大型看板類の設置などに十分配慮する必要がある。

歴史的資源の維持管理

市内に残る建造物は、老朽化が激しいものが多い、補修や改築の負担は重いので、資金確保の知恵が必要であり、費用確保は重要な課題である。

歴史的価値の再認識

普段、目にしていても、道路や集落の形体、その歴史的価値を認識することはない。歴史的な建物ばかりではなく、道路や集落形体などにも着目し、保全すると同時に、広報を行い、認識してもらうことも、重要な課題である。

道路の維持管理

基本的には、行政が清掃・維持管理するものであるが、頻度などは、状況によりマチマチである。最近は、経済的状況からよほど危険でない場合以外は補修されない。とくに歩道部は、ひび割れや雑草の繁茂が見られる箇所がある。景観的に重要な場所は、自主的な管理方法などを検討することも重要な課題である。

観光

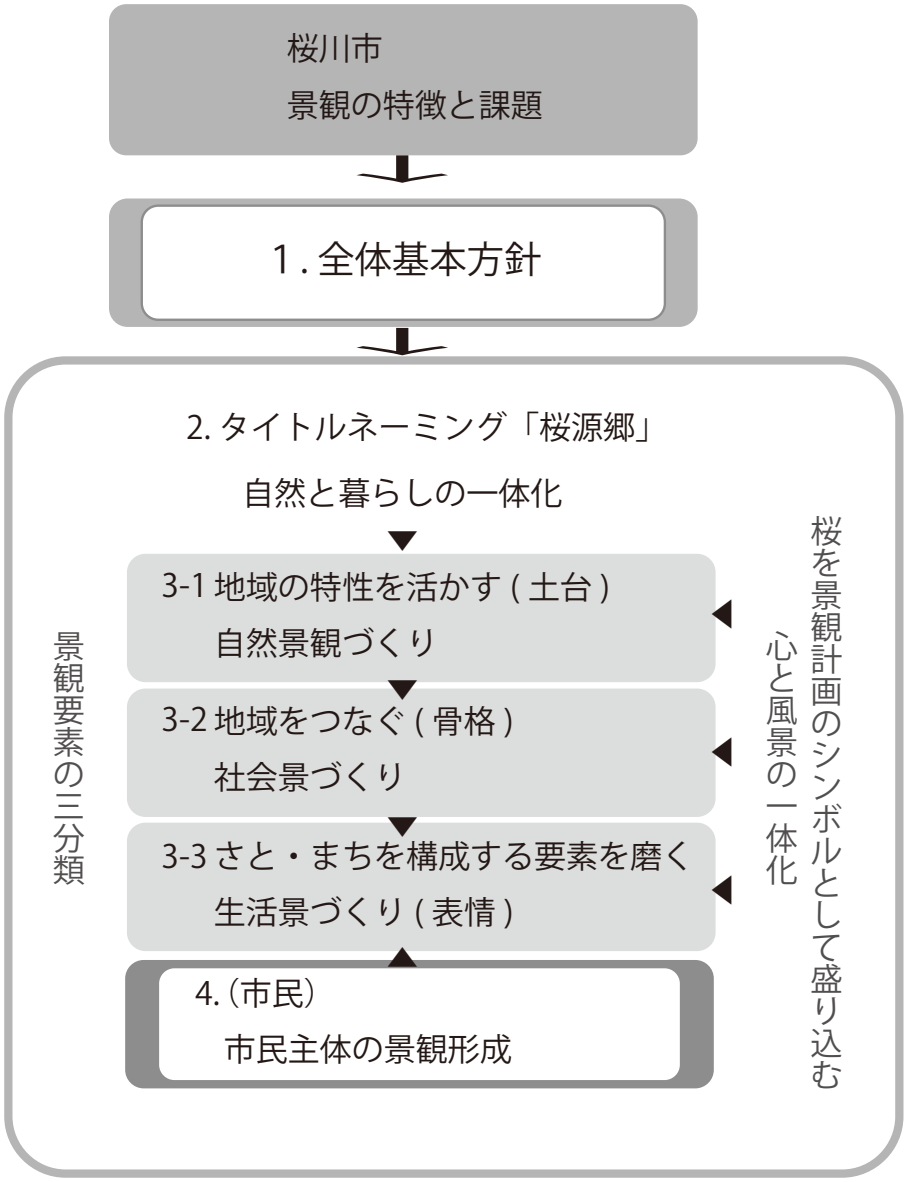
市内には、桜の名所が多い。とくに山桜は国の天然記念物指定を受けている。貴重な観光資源を活用する。

計画への取りくみ方

先ず、景観的な観点から、市の現状を把握する。そして、特徴や課題を抽出し、計画の基本方針や考え方を導き出す。

景観を構成する要素の大きなもの、自然を土台に、道路や河川など社会基盤を形成する景観要素を骨格に、そして、建物や工作物など、身近な景観構成要素を表情として、三つに分類する。それぞれの景観要素を、目標に沿って、しっかりと構築し、全体の調和を図る。

桜川市景観まちづくりマスタープラン



三つのステージごとに景観まちづくりを進める

3-1 地域の特性を活かす

市の大半は、山を中心とした自然環境が占めている。この恵まれた自然環境の保全や育成が、良い景観形成の大きな鍵を握る。ことから、自然的な景観要素に対する基本的な考え方を示す。

3-2 地域をつなぐ

河川や道路を中心とした有機的なネットワークを主な対象とする。それらは、景観要素として視界を占める割合が高く、その出来具合は、景観に影響する。このつなぐ景観要素についての基本的な考え方を示す。

3-3 さと・まちを構成する要素を磨く

主に建物や工作物を対象とする。これらは、時代の変化や技術などを反映し、多様性に富んだ形や色彩をもつ。また、生活に近い場所にあるため、多彩な表情を見せる。これらのデリケートな景観要素に対する考え方を示す。

市民主体の景観形成

市民の参加の考え方について提示する。

桜源郷をもとめて

1. 全体基本方針

豊かな自然を保全する

雄大な筑波山系を望む眺望を確保する

市内で最も自然で、雄大な山並みが日常的に、望むことができる地域である。

筑波山の山並みと集落の一体景観

山並みを背景に、田園を舞台にした生活が、繰り広げられている。日本の原風景的景観をできるだけ保全する。

桜川の景観向上と水質を保全する

桜川源流地域として水質保全に努める

水は森からの養分を運びあらゆる生命の維持にかかわる役割を持つ。源流として、清流としての水質や景観を大事にする。

桜川と市民がふれあい水に親しめる景観形成

現状の桜川は、機能も見た目も用水路化していて、「謡曲桜川」に謡われている桜川のイメージには遠い存在となっている。世阿弥により与えられた無形の価値を継承する。

豊かな農業景観を保全する

広々とした水田、うねりのある土地に展開する畑、屋敷林と屋敷のたたずまいなど、農業景観の典型が多く存在する。

とくに長屋門、生け垣、鎮守の森、旧村道沿いの景観木，耕地の境界を示す灌木、石塔など、たくさんの景観要素が存在する。このような桜川の豊かさを象徴する農業景観をできるだけ保全する。

歴史・文化の保全と創造

真壁地区をはじめとして、市内には歴史的な建造物が存在する。これらの歴史的建造物について、景観の保全・再生を図る。また、新しい建造物との創造的な調和を図る。

桜川独自の景観資源を活かす

山桜を活かした景観づくりを行う

国の名勝として、また天然記念物として指定された十一種の山桜は学術的にも貴重なものである。その価値を理解し景観づくりに活かす。

つくばりんりんロード・ハイキング路の活用

自動車交通路ではない貴重な、道の整備・拡充など、積極的な活用を図る。

水辺の景観を活かす

市内にあるため池や沼は、市民にとって大切な場所であり、生物にとっても貴重な空間である。

十分な安全性の確保と親水空間・ビオトープなどを検討し、景観の向上を図る。

荒地のイメージを改善する

山地内の採掘地、管理されずに放置された森林は、山を眺める風景の中に表れるため、目につきやすい。また、桜川沿岸の荒地は、水辺に近づくことを妨げたり、ゴミの不法投棄場所になりやすい。市内に数多く点在する荒地をできるだけ整備する。

2. 将来像

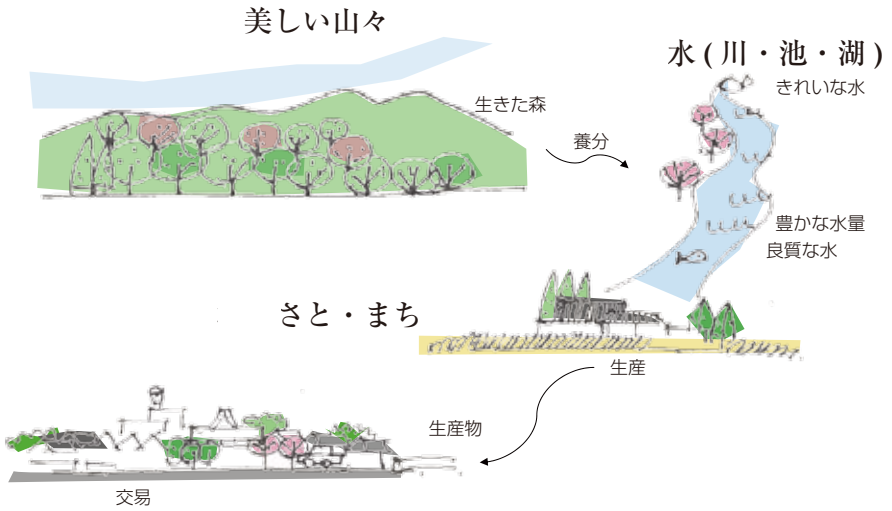
「桜源郷」

良い景観とは、豊かな自然環境とともに暮らす人々の営みと、そこから紡ぎ出される文化や歴史を含めた総合的な世界が、成立していることを感じながら見る風景にある。その風景の中心に、個性的な景観要素を立てることにより、桜川市らしい、独自の景観をつくることができる。

桜川市らしい景観をつくるシンボルとして、ふさわしいものの代表の一つが「桜」である。昔から山桜の自生地として有名であったこと、天然記念物指定となっている。桜は、市民にとっての誇りであり、心に深く記憶されているもので、地域のシンボルとしてふさわしいと考える。

タイトルは、一般に「桃源郷」と称されている。その言葉は、聖地を意味することが知られている。桜川市も自然に恵まれ、盆地状の地は、独立した聖地を思わせる。また、桜の名所として有名なことを理由に「桃源郷」の「桃」を「桜」に変えて、「桜源郷」と名付けた。市民にとって、理想郷を求める志をかきたて、新たな魅力を紡ぎ出すキャッチフレーズとして、景観まちづくりの原動力となることを期待している。

桜源郷 基本イメージ



良い景観を創るための景観要素の構成＝配役

主人公の市民を支える重要な景観要素は、山紫水明の自然環境にある。万物の命を保証する自然の中で、万物は生きられる。桜は、自然の象徴として位置づける。そして、次に名脇役として配置されるのが、人間の生み出す人工物、道路や建物などである。それらが単なる脇役では良い景観にはならない。全体の調和の中に、しっかりとした存在感が必要となる。主役・準主役・名脇役という景観構成要素がそれぞれの役目をまもりつつ、展開することで良い景観「桜源郷」が生まれる。

市民のとりくみ	主　役
桜が映る自然	準主役
桜が映るただずまい	名脇役
桜川市全域	舞　台

3-1

地域の特性を活かす

桜が映える自然

豊かな自然との一体感をつくる

市の面積の約半分を山地が占める。その山容は、大海原を思わせるようなやわらかなうねりとなって続いている。常に山の移ろいを感じながら暮らす恵まれた環境にある。

その美しく雄大な自然景観をまもり、つくることは最も大切なことである。

特に森林の再生、活用を図ることは、動植物全体の生態に大きく係わることで、我々の暮らしにおいても大変重要である。

水環境を大事にする

桜川市は、桜川水系の最上流域にある。したがって、その水質の良し悪しは下流域に住む人々の生活に直接的に影響する。

桜川流域内に住む人々と環境は一体であることを、常に認識し、清流として保つことが大切である。

当然のことながら、市の主産業である農業自体にも水質の問題は直接的な影響をもつ。人、生活、産業のどれをとっても水は欠かせないものである。ある意味、桜川水系は市民の命綱と言ってもよい。支流河川・用水・土手・護岸など様々な土木施設を含めた総合的な水環境の形成を図る。

日本の原風景といえるたたずまいを大事にする

市の平地部全般には、緑豊かな集落景観、耕地と調和したまち並みなど、桜川らしいのどかな景観が多く残っている。

まち部は、真壁地区に代表されるように、古都を思わせるたたずまいが、各所に残っている。桜川固有の文化を継承、発展させつつも、新たな活力のある、地域社会との共存も不可欠である。新旧が調和し、新たな時代にも同調する、活き活きとした景観形成を目指す。

環境に配慮する

景観計画と環境問題は、同じ仲間としてとらえる必要がある。視覚面のみならず、環境面でマイナスにならないような配慮が必要である。環境への負荷の低減や生態系への配慮など、景観形成の中で、できることを実行していく。

美しい山々と彩

高峰山、加波山に代表される山桜は、他の木々と混ざり合いながら、美しいモザイク模様を見せてくれる。

山の手入れと桜の植栽

標高五百メートル以下の山林のほとんどは、人為的に植林されている。現代では材木として活用されないために、人の手が入らず、放置されている山林が多く、立ち枯れている木も多い。桜を配植する場所としてはふさわしくない立地であり、木々の手入れが必要である。

元の自然林として再生するか、材木として再び活用するか、大きな問題である。

そのどちらかの過程において、桜や紅葉の綺麗な樹などを積極的に配植する。

3-2 地域をつなぐ

主な対象と基本的な考え方

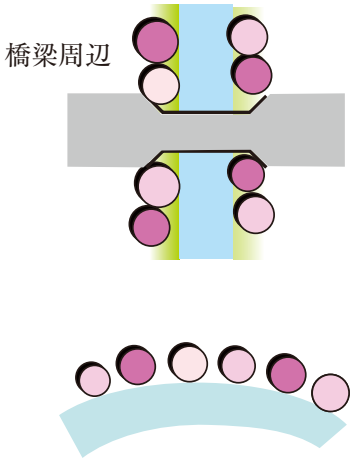
●桜川（支流・用水路などを含む）

桜川水系のネットワークの存在を示す

桜川やその支流、用水路などの水系ネットワークは、市内を網の目のように張り巡らされているが、そのほとんどが、掘割形式のため、通常に生活している場から川面を見ることが難しい。また、本流の沿道には荒地も多く存在しているため、人が川に近づきにくい。大事な生活を支えている川の存在が認識できないことは、景観資源の大きな損失である。

樹木を植えて河川の存在を示す

河川の護岸上部周辺に植栽を計画するこで、間接的ではあるが河川位置を知らせることができる。「謡曲桜川」の中にあるように、桜と桜川は、一体のイメージを想起させる。護岸の上部には、桜を中心とした配植を考える。また、左図のように、曲線部分や橋周辺の視界が開けている場所近くの配植は、景色として見ごたえがある。少ない配植でも効果が高い。



水鏡を活かし桜を二倍楽しむ

水面は鏡のように景色を映し、一つの風景が二倍に広がる。水辺の植栽は、季節、日の光などにより、様々な姿を水面に映し出す。

市内には、たくさんのため池や沼がある。つくし湖や上野沼など、桜を中心に配植されている。できるだけ多くの水辺を同様なイメージで整える。

①桜川源流域として、水質保全に対する配慮を十分に行う。

支流・用水路・山林に対しても同様の配慮を行う。

根本的には山林の健康的な保全が水質を左右するので、森林の活用または、自然回帰できるよな管理を検討する。

②農業用水路的表情をもつ場所を、自然河川的表情化を図る。

主要視点場を設定し（橋上など）部分的改修を検討する。

支流も同様に考える。

③市内の河川は川面が低く見えにくい、間接的な方法として河川位置、線形を見せることを考える。

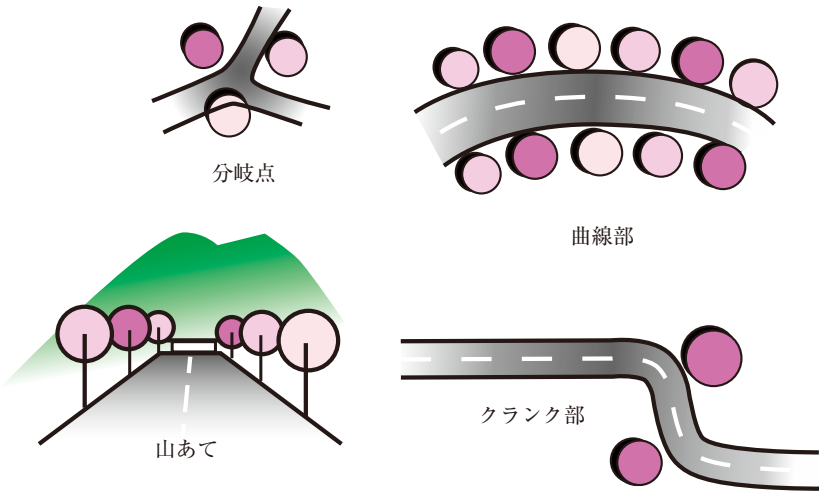
④河畔林の保全を行う。

水質浄化、生態系保全を図る。

大景観（山並み）の保全

筑波山・加波山などへ向かう（山アテ）道路沿道の景観要素を整頓する。

（町並み・屋外広告・旗・電線類など）



●つくばりんりんロード・ハイキング路

①旧駅舎周辺に桜を配植

駅空間の賑わいの記憶を留めたり、休憩所の目印として、桜の配植を積極的に行う。

（花が咲いていない時でも、桜の樹種は分かりやすい）

②移動空間としての安全性や利便性を確保する。

バリアフリー化

休憩施設、トイレなどの設備の充実

案内情報の充実

草刈りなど

旧真壁駅跡の桜

●道路法面

①改修時に合わせ、周辺景観との調和を図る。

●橋梁

①新築、改修時に合わせ、周辺景観との調和を図る。

河川に架かる橋梁は、水辺を眺める場所として、高欄・橋詰のデザインに配慮する。

主な対象と基本的な考え方

●主要幹線道路

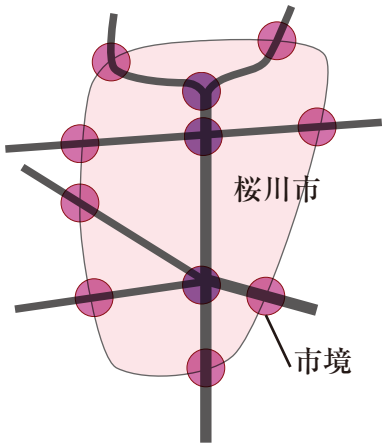
桜の木で歓迎の意を表現する

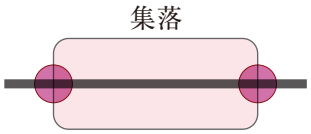
幹線道路上の市境、主要分岐点は他都市と桜川市、郊外と市内など、空間の転換点に位置する。そのため印象が深く残る。また、来訪者に対する歓迎の気持ちを伝えることができる．桜を中心とした花木などの植栽演出を行う。

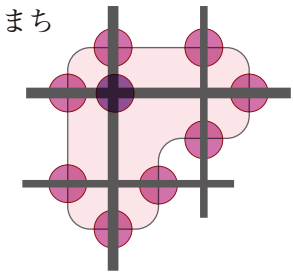
①幹線道路は、来訪者、通過者の視点にたった景観形成を図る

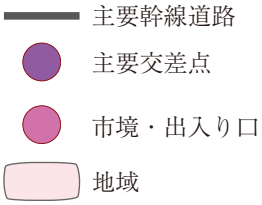
幹線道路を家に例えると、玄関の前面道路と言える。ある程度、外向けに意識する空間であり、来訪者からはその家の様子を知ることができる場所である。市の公共スペースとしての意識をもって、景観を構成する要素の質やデザインを判断する必要がある。並木を検討する場合は、積極的に桜を配植する。

修景地概念図









桜並木

3-3 さと・まちを構成する要素を磨く

生活の拠点として、主に住宅や事務所・商店・工場など、多様な建物の集合体がさとの集落であり、まちである。景観要素の中心は、建物群となる。個々の機能や目的、歴史の様式、技術や材料など、様々な要因によってつくられる複雑な集合体である。一つのねらいで統一的な景観を構成するのは大変むずかしいが、できるだけ調和を図る。

桜が映えるたたずまい

桜源郷というねらいに対し、景観形成の方法として、引き立つ主役を見せるには、複雑な集合体をなるべく目立たないようにするやり方がある。

一つは桜を景観木として建物群や建物が名脇役になること、つまり控え目な見せ方をする。

二つ目は、客をもてなす気持ちを花で表し、視線を引きつける。

二つのやり方は、新しくもなく、昔から行われ、現代に引き継がれている。以下の写真が示す通りである。桜川市内では、各所にそのやり方を見ることができる。

この伝統的なやり方に、今回は桜の要素を加え「桜源郷」の実現を目指す。

屋敷の景観木の一つに桜をあしらう

おもてなしの心を花や花木で表す

おもてなしの心を見世庭で表す

通りから門の奥の庭を見せる

そばに近づいて庭をのぞく

庭を開放する

名脇役としての整備

●まち、集落（建造物群）

①歴史的形成の基本となるまちの形式をまもる。

城下町・門前町・宿場町など

島状集落・線状集落など

町割・構えなど

まちの形をまもるために、市街地の内外を明確にする（スプロール化しない）

②まちとしてのまとまりをつくる。

屋根の形や材料、色彩などの統一化を図る。

写真上：まとまりのある屋並み
写真下：形、色彩が複雑な屋並み

●まち並み

①間口・構え・軒高など、隣接する建物との共通化を図る。

歴史的建物が連続する場所では、とくに様式、素材の統一を図る。

②街路空間を構成するものは、できるだけ、まち並みに合わせたデザインとする。

（舗装・街路樹・街灯・柵類・案内板など）

③電線・電柱類は、まち並み景観が良く見えるように工夫する。とくに重要な景観（場面）においては、様々な方法を検討し、景観の保全を行う。

④屋敷林・景観木などをできるだけ保全する。

●大型建造物

①大規模建造物（大型SC・工場など）は、都市計画上の配置を原則とし、施設の周辺には、十分な緑化を図る。

②まち、集落内に位置する大規模建造物は、周辺の建造物のボリュームを、ヒューマンスケールへの配慮から、軽減する見え方などのデザインについて、十分な検討を行う。

●歴史的建造物

市内には、歴史のある寺社仏閣・民家・町屋・見世蔵など多数存在する。その多くは、忠実な再現は困難な場合が多が、原則として、できるだけ往時の技術、材料に従い修復し、保全を図る。
（門・塀・庭・樹木なども同様）

住んだり、使用している建物の場合は、現代生活に合わせた機能性や快適性の確保ができるような工夫をする必要がある。個々の事情や使い方にあった保全が重要となる。

歴史的な建造物に習う場合

桜川地方には、長年積み重ねてきた建物のデザインがある。それらのデザインの踏襲は、地域らしさを産む。安易な模倣ではなく、現代の感覚や技術、材料などを駆使し、感覚的な整合と質を確保することに努める。

桜川市内で見られる歴史的な建築などの様式

生垣門

長屋門

高生垣石垣

民家

屋敷林

植木

四脚門

町屋

見世蔵

桜源郷をはぐくむ

4. 市民主体の景観形成

桜源郷の実現へ向けて いっしょにやろう

自分たちの生活の場として、自分の家のような意識を持って風景づくりを考えることが、最も重要である。川や緑を愛し、地域文化や産業、風土を大切にする心は、市民のみならず、訪れる人々の心をも豊かにする。そうした意識を持つ市民一人ひとりが、主体的に行動を起こすことで、本当の意味での魅力的な景観が生まれる。

志の輪を広げる

景観をまもりつくる実践は、日常生活の行動や行事として、あるいは、事業などに取り込まれてこそ前進するものである。そのためには、一人より二人、二人より三人、仲間どうし、より多くの人々が参画していくことが重要である。

・同じ志をもつ
・一人ひとりが行動する
・いろいろな知恵を出す

・市民への計画の周知
・学習の機会をつくる
学校教育・環境学習・生涯学習など、様々なものを活用し、景観計画の理解を図る。

・人材を育てる
小学生、中学生などへの学習機会を設け次世代へ継承していくことが大切である。
・行動する仲間をつくる
（ボランティアグループ・ＮＰＯなど）

ルールをまもる、つくる

目標をより具現化するためには、明確な対象に対するルール化が必要となる。様々なルールの周知や遵守、新たなルールに従うことにより、確実に目標達成に近づくことができる。

ルールの例
・景観法、茨城県景観条例
同屋外広告物条例、桜川市景観条例、その他の法律、条例、基準類など
・重要地区指定、地区計画、景観協定、緑化協定、建築協定
・任意の景観基準、協定、憲章、宣言、景観デザインガイドライン

資金をつかう、つくる

実践の内容によっては、経費的な負担が伴なってくる場合がある。また、大きな事業になればなるほど費用負担が増大する。官・民、様々な団体による助成の活用や自ら資金を産み出し、独自の財源確保を行うことは大切である。

・公的助成制度の活用
・民間助成制度の活用
・募金、基金などをつのる
・企業広告を活用する

事業化を図る

景観に係わる事業のすべてがボランティアに終わることはない。

実践を長続きさせるためには、資金の手当ては必要なことである。知恵と工夫次第では、ビジネスモデルとして、あるいは商品としての価値を産む可能性がある。常に、事業化の機会を伺う精神をもつことが大切である。

・ベンチャー企業化
・地場産業活性化
・観光事業化・環境事業化

計画の発展と管理

重点地域指定

市民の景観形成に対する意識が高い地域、土地利用の転換などを行った地区などにおいて、地域ごとの景観誘導施策を検討し、より計画趣旨に沿った景観形成を図る。

整備プログラムの検討

景観計画を実行に移すための整備プログラムを検討する。たくさんの市民の参画機会を増やすことを目的とし、多様な実行内容を検討する。

デザインレビュー

具体的な形が現れる事業成果に対し、視覚的に公開できる仕組み（デザインレビュー）をつくる。デザイン内容の確認と基準を越えた創造や発見、他への波及効果など質の高い景観形成が行える。

景観デザインガイドラインの検討

計画の主旨、考え方をより深く、わかりやすく伝えるためのデザインにかかわるガイドを示す。

事業評価

整備プログラムが順調に進んでいるか、確認する仕組みと評価方法を検討する。

計画書の評価

時代とともに、また、実行率の上昇とともに、計画段階との開きが現れる。定期的に計画書の内容を評価する仕組みと、評価基準を検討する。